

一般・消化器外科特別任命教員教授に就任して

大阪医科大学一般・消化器外科 特別任命教員教授 田中 慶太郎

この度、平成28年5月1日付をもちまして大阪医科大学 一般・消化器外科特別任命教員教授に就任いたしました田中慶太郎と申します。また、平成28年4月1日より一般・消化器・小児外科科長に就任させていただいております。

私は1991年（平成3年）に大阪医科大学を卒業し、同年より母校の一般・消化器外科学教室に入局後、現在まで一貫して教室および関連施設で勉強させていただいております。この間、教室の3代にわたる教授にここまで導いていただきました。初代教授の板谷博之先生には残念ながら面識はなく、平成3年の入局時には教室第2代目教授の岡島邦雄先生の門を叩かせていただきました。入局前の学生時代にさえ、筋金入りの厳しい教授だとお聞きしていましたが、自身は中学以来大学卒業までサッカーを通じて培ってきたチームプレーと忍耐力を自負しており、緩い環境では成長できないと思っておりましたので思い切って入局させていただきました。実際の教室は、学生時代には経験したことのない想像を絶する厳しさでありました。その根源は岡島教授自身のご自身に対する厳しさにあると思っております。入局後の研修医時代のもっぱらの仕事は入院患者のアナムネとりであります。主訴、現病歴、既往症、家族歴、全身の現症（頭頂からつま先まで）、局所所見をそれは詳細に診察、記載することを繰り返し教わりました。驚いたことには入局したての研修医のアナムネを毎朝必ず、詳細に岡島教授はチェックされました。そして、一字一句の語彙の間違い、論理の合わない記載、不明瞭な記載を赤ペンで

修正され、時には烈火のごとく指導いただきました。勿論、上級医の手術記録やプレゼンテーションを初めとしていかなる日常の医療行為にも、きっちりとチェックを入れられ自ら指導される姿から、医師たる者、いかなる医療行為にも妥協は許されないことを教わりました。岡島教授自身が決してお自身を甘やかされず追い込みながら外科医として患者を診る姿勢で医局員を引っ張っておられましたので、何とかついて行こうとする当時の医局員の雰囲気は何とも言えない緊張感を漂わせていたように思います。自分に厳しくあるうえで、仲間にも厳しく、切磋琢磨することが医療レベルの向上につながることを身に染みて教わりました。

平成9年4月には第3代目教授の谷川允彦先生が就任され、教室の雰囲気は一変しました。谷川教授は臨床の実績は勿論のこと、研究実績に富んでおられ、臨床と研究とを新しい手法で結んで行かれました。着任後すぐから今で言うところのtranslational researchを導入され、アポトーシス、抗癌剤感受性試験、樹状細胞などを臨床に即した観点から探求する姿勢を示されました。さらに教室を大きく前進させられたこととして、内視鏡外科を本格的に導入されたこともあげられます。当時から教室の奥田準二先生は腹腔鏡下大腸手術のパイオニアとして活躍されていましたが、他の内視鏡外科手術の分野ではまだまだ実績が十分な状態ではありませんでした。谷川教授は就任時にはほとんど腹腔鏡下手術の経験をされていなかったにもかかわらず、内視鏡外科手術の未来を見据えて積極的に腹腔鏡下手術を取り入

られました。そして、岡島教授から伝統を引き継いだ、胃癌外科にも腹腔鏡下手術を導入されました。また、国際的にも広い視野で交流を持たれ、特に腹腔鏡下手術の聖地ともいえるフランスストラスブール大学 IRCAD/EITSのJacques Marescaux教授と交友を深められました。特筆すべきは、同施設との共同研究で腹腔鏡下手術に関するインターネットテキストとして、WebSurg Japanを立ち上げられた功績からフランス国家功労賞シュバリエを受賞されています。私自身もIRCAD/EITSへ留学させていただき、このプロジェクトに参加させていただきましたことが大きな財産になっております。このような背景を築かれながら、谷川教授ご自身が腹腔鏡下胃癌手術のパイオニアになられ、大阪医科大学 一般・消化器外科が腹腔鏡下手術の教室として全国に名前を知ってもらえるようになりました。現状の医療に甘んじず、常に未来を予想して外科医療の方向性を決定して行くことの重要性を学ばせていただきました。

平成23年6月には第4代目教授の内山和久先生が就任され、さらに教室は変化してまいりました。教室初の肝臓外科を専門とされる教授で、豊富な肝切除の経験を積まれており、従来は切除が困難であった症例に対しても様々な工夫のもとに安全に肝切除術を施行され勉強させていただいております。一方で、肝臓外科にも腹腔鏡下手術を慎重に導入され、これまでの教室の歴史と調和した次世代につながる新しい手術として徐々に定着してきております。また、定型化した腹腔鏡下手術で安定した手術成績が得られるようになり、従来にも増して若手外科医に執刀の機会を持ってもらえるように指導いただいております。さら

に、日常臨床として行っている手術の疑問点を解決すべく、臨床試験を積極的に奨励されエビデンスに基づいた安全な臨床現場の構築方法を学ばせていただいております。

このように大阪医科大学一般・消化器外科学教室は40年の伝統のうえに現在に至っておりますが、各時代に特色ある外科医療を展開してまいりました。板谷教授に始まり、私にご教授いただきました岡島教授、谷川教授そして現職の内山教授それぞれが築き上げられてきた大きな業績が有機的にうまく絡み合って現在の教室があることを実感しております。振り返りまして、周りを見渡しますと、3代の教授に渡って学ばせていただいた教室員はほとんど教室に残っていないということに気がされます。これまでそれぞれの時代に培ってきた教室のよき伝統をうまく後進に伝授し進歩させることによって教室の発展、大阪医科大学の発展に少しでも貢献できますように努力を惜しまない所存でございます。最後に、これまで多方面でご教示いただいてまいりました、大阪医科大学医師会の諸先生方、同門の先生方、コメディカルの方々に心より御礼を申し上げまして就任の挨拶とさせていただきます。今後ともご指導ご鞭撻いただきますようよろしくお願い申し上げます。